

西洋教育史研究（その1）

藤 勝 宣

はじめに

本稿は、教育法規上の「教育の理念並びに教育に関する歴史及び思想」に関する基礎的研究であり、特に西洋の教育の歴史を検討対象として取り上げながら、教育の理念や本質を考察しようとする試みである。

周知のように、他の教育学研究に比べて、日本における教育史研究、とりわけ西洋教育史研究の歴史は古い。しかしながら、現在、西洋教育史研究が盛んであるとはとても言えない。日本における教育史研究の専門学会である教育史学会は、大づかみに言って、日本教育史、西洋教育史、東洋教育史という3つの研究領域から構成されているが、もともと研究者の数が少ない東洋教育史研究を別にすれば、以前は日本教育史研究と西洋教育史研究は拮抗していた。しかし、現在の学会では圧倒的に日本教育史に関する研究発表が多く、発足当時からしばらくの間、ほぼ同じであった会員数も今では日本教育史の研究者が西洋教育史の倍以上になっている。その原因をここで詮索するつもりはないが、このことから分かるように、とまあ西洋教育史研究の勢いが衰えていることは明らかである。また、視点を研究から教育（つまり授業）へ移しても、歴史に対する学生の反応は芳しくないように感じる。学生は自分に関係がある身近なテーマや内容には興味を示すが、遠い過去の話にはなかなか興味を示さない。すぐに何かの役に立つ「実学」には目を向けるが、そうではない「虚学」には関心が薄い。

このような状況ではあるが、教育の理念や本質を探究・考察しようとする手段として、西洋教育史は今もって魅力を失っていないと筆者は考えている。教育を広くまた巨視的に社会との関係で探究し、歴史の進展の中で「教育とは何か？」という問いを冷静に熟考する手段として、西洋における教育の歴史はよい素材を提供してくれる。本稿は、大学生の知的好奇心を刺激することをめざした西洋教育史の一つのストーリーを作る試みであり、従って、大学における「教育の理念並びに教育に関する歴史及び思想」に対応した授業科目のための研究ノートかつ講義メモという性質を有している。

1. 古代ギリシアのポリス共同体と教育

まず、古代ギリシアから始めよう。古代ギリシア・ローマの文化は西洋の最も重要な文化的源泉であり、教育史においても飛ばすわけにはいかない。ここでは、西洋教育史の泰斗である長尾十三二の説明をベースにして考察を進めていきたい。長尾は、古代ギリシアにおける「ポリス共同体の成立」について、次のように説明している。

「エーゲ海一帯では前3000～1600年にかけてトロイア文明やクレタ文明が栄えたのち、前1600～1200年頃、技術的にきわめて進んだ青銅器時代の文化とみなされるミュケーナイ（ミケーネ）文明が開花する。粘土板文書に残された線文字Bの解読（1952）によって明らかにされたところでは、この文化の担い手はギリシア人であって、かれらは当時、王権と官僚制の支配するオリエンタ的な社会体制のもとで生活していたらしい。しかし、前1200年頃、北方からの侵入者によってミュケーナイ文明は破壊され、約3世紀にわたる暗黒時代ののち、前9～8世紀になってポリス共同体が成立する。ホメロスの詩篇は、エーゲ海東部に新天地を求めて移住した人々の間から生まれたもので、ポリス成立前夜のギリシア社会の様相や、そこでの人間生活のさまざまな哀歓を伝え

ており、現在もなおヨーロッパ精神文化の貴重な源泉の一つとなっている。なお、オリュムピア祭典競技の起原もまたミュケーナイ時代あるいはさらにそれ以前にまで遡りうるといわれている。

ポリス共同体は、それまでの村落(コメー)共同体の統合によって、すなわち集住(シュノイキスモス)によって、成立した。集住の理由はさまざまであるが、たとえばアテネでは、アッチカ地方の村落から成長した有力者たちが、政治・経済・軍事などの必要から中心部に集住したことからポリスができたといわれ、またスパルタではラコニヤ地方に侵入した征服者としてのスパルタ人が、先住民に対する支配体制を確立するために集住したことからポリスが始まったといわれている。

いずれにせよ、ポリス共同体は、専制的な王権支配のもとでの貢納制や共同体的規制を否定しうるまでに自立した共同体成員が、成員中では比較的有力な貴族層の政権独占(貴族制ポリス)のもとで、貴族層と平民層(奴隷を所有する中・小分割土地所有者としての自営農民兼戦士)との対立を内包しながらも共同体成員の強い自衛意識を紐帯として、ポリス相互間の敵対関係に対処しようとしたところから生まれた新しい生活単位(国家)であった。この貴族政ポリスが崩壊し、平民たちの政治参与が実現するのは前7～6世紀のことである。前700年ごろの詩人ヘシオドスは、『仕事と日々』において、貴族政ポリスのもとでの農民の生活と労働のきびしさを語っている。

貴族政ポリス崩壊の原因は ポリスの相対的な人口過剰と、貴族層内部の政争とを解決するために前8世紀中葉からおこなわれた植民市の建設によって、商工業が発展し、奴隷制も進み、さらに貨幣経済の普及という事情も加わって富裕な市民層が形成され、土地貴族の地位が動揺したことや、また同じ理由から手工業が進んで武具(鉄製)の供給が容易になり、中・小土地所有者(平民)が武具を自弁していわゆる重装歩兵となり、その密集部隊が戦闘において決定的な役割を果たすようになって、おのずからその政治への発言権が強まったためと言われている。この貴族と平民との抗争の過程で、立法家や僭主が現われ、

慣習法を成文化して貴族の恣意を抑えたり、クーデターによって貴族政を打倒したりした。アテネのソロンやペイシストラトスがその好例である。こうして前5～4世紀においてポリス共同体はその最盛期を迎える。

貴族政ポリスが成立した頃には、ギリシアの社会はすでに鉄器時代に移行しており、線文字Bにかわってフェニキア風表音文字に範をとった独特のアルファベットをつくり出していた。この文字によって人々は叙事詩だけでなく、抒情詩や散文を書き、あるいはまた世界と万物の起原をたずねる哲学的思索の成果を綴ったりしたのである。すでにソロンやペイシストラトスの時代には、ホメロスやヘシオドスの詩を石碑に刻んで、格言として人々の間に流布させることがおこなわれたらしい。レスボス島の女流詩人サッポーに代表される人間の自然の感情の素直な表明や、タレスに始まる万物の根源（アルケー）についての論理的な追究の努力などは、神話的、呪術的な世界観から人間の感情や理性が解放され始めたことを示す事例とみることができる。」⁽¹⁾

ここで指摘されているように、エーゲ海一帯では、まずトロイア文明、クレタ文明が開き、次いで、エーゲ文明の後期として位置づけられるミケーネ文明が栄えた。ミケーネ文明に関しては、①「文化の担い手はギリシア人」であって、②「技術的にきわめて進んだ青銅器時代の文化」であり、③「王権と官僚制の支配するオリエンタ的な社会体制」であったらしい、という点を押さえておきたい。この点について付言すれば、ミケーネ文明を作ったのは、北方から移住してきたギリシア人（アカイア人）であり、彼らがクレタ文明から海洋文化や文字を学び（クレタ文明の線文字Aを模して、古いギリシア語である線文字Bを作った）やがてクレタ文明を滅ぼした。また、彼らは、巨石による城塞や墳墓を建設し、さらには英雄崇拜を推測させる黄金のマスクなども残している⁽²⁾。

このミケーネ文明は、紀元前12世紀末頃に、鉄器をもって侵入してきたドーリア人（ギリシア語のドリリス方言を話し、やがてスパルタ等を作った）によ

て滅ぼされた。これ以後、ギリシアは鉄器時代に入るが、文字は忘れられ、歴史も不明で、紀元前12世紀から紀元前8世紀までの約400年間は、いわゆる「暗黒時代」と呼ばれている。但し、この「暗黒時代」にギリシアがオリエン的な王の支配体制から脱却した点は見落とすことができない⁽³⁾。そして、この「暗黒時代」は、ホメロスの口承の叙事詩『イリアス』や『オデュッセイア』の出現とともに終焉を迎える。

こうして、いよいよポリス共同体が成立する。長尾が言うように、このポリス共同体は、オリエン的な王権支配を否定して（つまり、スパルタにせよアテネにせよ、元々は王政であったのだが、それを脱却して）成立時は貴族政ポリスという形態をとり、貴族層と平民層の対立を内に抱えながらも、それを共同体メンバーの強い自衛意識で克服し、他のポリスとの敵対関係に対処するために生まれた生活単位であった。従って、村落共同体の「集住」によって成立したポリス共同体は、対外的関係によって内的構造を規定されていたのであって、あくまでポリス共同体の防衛という意識が最優先され、それがそれぞれの個性あるポリス共同体を貫く共通の原理となっていた。具体的には、ポリス共同体の防衛を担う戦士の在り方・役割がポリス共同体に多大な影響を与え、またその変化をもたらす原因になった。貴族政ポリスの崩壊の原因も、平民層が戦士として活躍し、その結果、政治的発言力を増したということに帰す面が大きい⁽⁴⁾。

付言すると、当時のギリシア人たちは、方言の違いによって、ドーリア人（たとえばスパルタ）イオニア人（たとえばアテネ）、アイオリス人などに分かれていたが、他民族をバルバロイと呼び、他方、自分たちをヘレネスと呼んで、言語・宗教・ホメロスの詩・デルフォイのアポロンの神託・オリンピアの祭典などを拠り所として一民族としての意識を有していた。

とはいえ、こうした共通点も持ちつつも、すでに述べたように、個々のポリスはそれぞれ個性を持っていたのであり、とりわけスパルタとアテネは際立った対照をなしていた。そして、その理由は、長尾が言うように、アテネが「アッ

チカ地方の村落から成長した有力者たちが、政治・経済・軍事などの必要から中心部に集住したことからポリスができた」のに対して、スパルタは「ラコニヤ地方に侵入した征服者としてのスパルタ人が、先住民に対する支配体制を確立するために集住したことからポリスが始まった」からである。このような違いが、その後の両者の教育へ大きな影響をもたらした。

しかし、アテネとスパルタの教育の違いにふれる前に、ここでは2つほど先に述べておきたいことがある。それはポリス共同体の共通基盤の一つであったホメロスの詩の教育的機能であり、さらに古代ギリシアでの教育観の基礎となった肉体労働と精神労働の分離の問題である。

まず、ホメロスの詩の教育的機能については、マルーによる次の指摘に耳を傾けねばならないだろう。

「われわれの歴史は、ホメロスから始められねばならない。というのも、ギリシア文化の伝統が、以後とだえることのない姿で始まったのはホメロスからであるし、ホメロスの証言こそは、アルカイク期の教育を調べるのに有用な、最も古い資料だからである。それにまた、クラシック期の教育にホメロスが果している主導的な役割は、われわれに、教育というものがその場合すでに何を意味しえたのか、はっきりと認定させずにはいないだろう。」⁽⁵⁾

つまり、マルーによれば、文化史的に見て、およそ紀元前7世紀から前5世紀のはじめにかけてのアルカイク（古拙）期から、それに続くクラシック期において、「プラトンが言っているように、ホメロスは文字通り、ギリシアの教師であった」⁽⁶⁾のであり、ホメロスは「古典期の教育のあらゆる伝統の土台」⁽⁷⁾であったのである。

では、ホメロスは、当時のギリシアにどのような価値観を与えたのであろうか。マルーによれば、それは「ホメロスの英雄の理念」⁽⁸⁾であり、「騎士の

倫理」⁽⁹⁾であった。この点について、マラーは次のように説明している。

「完全なホメロスの騎士の道徳的理念を体現しているのは、帰途のオデュッセウスよりもはるかに、アキレスの気高く純粋な姿である。それは一口にいて、栄誉という英雄のモラルである。古代のあらゆる世代はホメロスにまで遡り、そのホメロスにおいて、貴族主義的倫理の基軸であるもの、栄光への愛を見出すのであった。」⁽¹⁰⁾

「ともあれ、勇者が競い合う環境で獲得された栄光、名声こそは、価値の尺度であり客観的な認知であった。騎士の道徳の原動力となった栄光への、あるいは、より優秀と宣言されることへの熱烈な希求は、そこから生まれるのであった。それを最初に表現したのはホメロスであり、古代の人びとは、ホメロスのなかに情熱的に、このスポーツ的競争としての存在の概念を見い出した。」⁽¹¹⁾

「詩人の作品が目指したものは、本質的に芸術的な類のものではなく、英雄を不朽のものとするのであった。プラトンはいう。詩人は『古人の数々のいさおしを栄光で飾り、そうすることで後の世を教育するのだ』と。わたしはこの最後の文句を重視したい。その文句こそはまさに本質的だと思われるのである。ホメロスの教育的影響を理解するには、かれ自身のやり方や、かれが英雄の教育をどう考えていたかを読みとれば十分である。かれはその英雄たちに、かれらの助言者の口をかりてすぐれた先例を教示する　いい伝えられた勲しによる先例、かれらの闘争本能や競争心を目覚めさせる先例などを。…(中略) … ホメロスの教育の秘密はここにある。英雄の先例『パラダイグマ』がそれだ。ちょうど中世末期に、『キリストのまねび』がわれわれに遺されたように、ギリシアの中世は、ホメロスを介して、クラシック期のギリシアに英雄のまねびを伝えた。ホメロスがギリシアの教師だったというのは、こうした深い意味合いにおいてなのである。かれはポイニクスのように、ネストルやアテネのよ

うに、その教え子たちの心に、英雄の「卓越性」という理想のモデルを示してやまなかった。と同時に、その作品の不朽性によって、栄光という最高の報酬の存在をも示すのである。ホメロスの教えがどれほど学ばれたかは、歴史の示すとおりである。英雄の先例は、ギリシア人の心につきまとして離れなかった。アレクサンダー(またかれの後のピュロス)は新しいアキレスでありたいと思い、それを夢みた。どれほど多くのギリシア人が、かれと同様ホメロスに、『短い』ながら英雄的な『栄光に比べて、長いながらたるんだ人生を軽んずる』ことを学んだことだろう。⁽¹²⁾

以上のことをまとめれば、次のようになるだろう。「ホメロスの英雄の理念」つまり「騎士の倫理」の中核は、「アキレスの気高く純粋な姿」に体现されるような「栄光への愛」であり、「より優秀と宣言されることへの熱烈な希求」である。そして、ホメロスは「英雄を不朽のものとする」ことをめざして、ギリシアに「英雄のまねびを伝え、英雄の生き様・「アレテー」を教えたのである。ホメロスの詩こそは、当時のギリシア市民というエリートに対する最強の道德教育のテキストであった。

次に、古代ギリシアでの教育観の基礎となった肉体労働と精神労働の分離の問題であるが、この点については長尾の指摘にまず耳を傾けよう。

「タレス以後の哲学がイオニヤやシシリーのような商工業の栄えた植民市において開花したという事実は、この地方に富裕な資産家層が形成され、その結果、肉体労働と精神労働との分化が進んだこと、つまり生産労働から解放され、純粋に知的な学習に余暇時間をあてることに人生の意義を見出し、また、そうすることによって統治者としての徳性や教養が磨かれると考える一群の人々が生まれたこと、を示している。前7世紀の中葉にイオニヤに導入された貨幣が、人間の抽象的な思考能力を高め、それが現象の本質に迫る哲学的な思考の発展

を促したとみる説もある。いずれにせよ、植民市における商工業の発展が、経済的に余裕のある市民層をつくり出した結果、文学、哲学、音楽などの精神的諸価値をそれ自体として追究する可能性が生まれ、それが個人の感情や思考を解放して、やがてポリス市民たちの間に個性の自覚を高める条件をつくり出したと考えられるのである。そしてこれは、教育史的にみれば、人間にとって新しい学習の目的および対象が自覚されたということであった。人々はいまやなんらかの実用的目的のために『知る』のでなく、純粋に『知る』ことそれ自体を喜びとし、またたんに『生きるために』学ぶのでなく、『よく生きるために』(ソクラテス)学ぶことの意義を認めるようになったからである。むしろそれは限られた一部の人間にだけ許されたことであった。しかし、このような閑暇を活かす学習(自由教育)こそ将来の統治者にふさわしい学習であるという社会的評価がやがてつくり出されてゆくことになる。しかしながら、他面、このことが生産労働(技術)の学習と知的学習との不幸な分離を決定的にした。もっぱら奴隷労働に依存する社会体制に疑問を抱かなかった人々は、技術の改良を奴隷労働の軽減に役立てようとはしなかったからである。技術にたずさわる人々の社会的地位は低く評価され、したがって技術の進歩それ自体もやがて著しく停滞する。人類の学習史・教育史はこれ以後、労働と学習の分離という不幸な矛盾を抱えこみながら展開することになる。」⁽¹³⁾

長尾は、肉体労働(および生産労働の学習)と精神労働(および知的学習)の分離を「不幸」なことだと評価し、「人類の学習史・教育史はこれ以後、労働と学習の分離という不幸な矛盾を抱えこみながら展開することになる。」と述べているが、ここでは、その是非の問題はさておき、2つのことを指摘しておきたい。

まず第一に、この時期に生じた肉体労働と精神労働の分離、および精神労働の価値的優位という考え方は、それ以後の、西洋の教育に多大な影響を及ぼした。たとえば、それは中世の大学における「自由学芸」の考え方の基礎になっ

ており、この点について、碩学クルティウスは次のように述べている。「中世の教育体系がもつ基本的性格はギリシア古代にまで遡る。…（中略）…この教育体系について古典的といえる証言力をもつのは、Artes liberales および studia liberalia を論じたセネカの第88書簡である。これらは営利に役立たぬ勉学をいう。これらの勉学が《liberal》と称するのは、自由人 liber にふさわしいからである。それゆえ、音楽は数学の部門として自由学科の圏内に確固とした地位を占めるが、絵画、彫刻、その他の手工芸（artes mechanicae）はそれから除外されている。」¹⁴現在の日本では、営利に役立つ実学が流行っており、実利に直結する学問を重視する傾向が見られるが、肉体労働と精神労働の分離、および精神労働の価値的優位という考え方には、営利を役立たぬ勉学こそが人間精神陶冶の根本であるという意味が込められていたことを銘記すべきであろう。このことは、教育に係るあらゆる事柄を営利・実利に関連付けようという姿勢に警鐘を鳴らすものであると考える。ともあれ、教育に対するヨーロッパ的発想の基盤として、営利・実利を目指す学問は価値の低いものだと評価する立場が成立した点を確認しておこう。精神と肉体の上下関係は、知的好奇心（テオリア）と営利、市民と奴隷という関係に読み替えられることになる。

次に、これはよく言われることであるが、「学校（school）」の語源はギリシア語の「閑暇（スコレー）」に求められる。そして、長尾が述べているように、「閑暇」「余暇時間」は生産労働・肉体労働から解放されたギリシア市民というエリートの持っていた特権であった。長尾は、労働と学習との分離が不幸なことだと主張しており、たしかにある面ではそれは首肯できるのだが、やはり、生産労働に追われて、全く時間的余裕がない人間は、ある意味、学校で学ぶことができないと認識した方がよいのではなかろうか。実際、学校は肉体労働からの時間的解放が前提となっていなければ成立しないだろう。教育的視点から労働を学習に結びつけるという話と学校成立の基礎的条件の考察という話とを混同すべきではないと考える。

以上で、当時のギリシアの教育を通底する要素をめぐる考察は終わる。次に、

そのような精神世界を共有しながらも著しく異なった教育をおこなったスパルタとアテネの教育へ目を転じてみよう。

2. スパルタとアテネの教育

まず、スパルタである。スパルタの教育は、「スパルタ教育」という形で現代までその名を残す厳しいものであったが、その実態はどのようなものであったのか。この点については、『プルターク英雄伝』のリュクルゴスの項を参照することが通例となっているので、ここでもまずそれを見てみたい。

「父親には生まれた子供を育てる完全な権限はなく、レスケーと呼ばれる場所へ子供を抱いて連れていった。そこには部族員のうちの最年長者たちが坐し、赤児をよく検査して、もししっかりしていて強壮であれば、その子に九千の持分地のうちの一つを割当てて、育てるように命じた。しかし、もしその子が劣悪で不恰好であれば、そもその始めからまったく健康と体力向きに生まれつかなかった子が生きることは、その子自身にも国家にもよくないとして、タユゲトス山の傍のアポタイといわれる深い穴のような場所へ送り出した。また同じ理由で、女たちは赤児の全身を水でなく葡萄酒で洗って、その体質についての試験を行なった。というのは、癩癩持ちで病身の子は生の葡萄酒のために痙攣に陥って正気を失うが、健康な子は身体の状態をいっそう鍛錬され強化されると言われているからである。また、乳母の場合は技術を伴うある種の配慮が求められ、彼女たちは赤児を、むつきなしに育ててその手足と外形を自由に、そのうえ、食事には満足してえり好みせず、暗闇を恐れず、ひとりであることを怖がらず、下劣な怒りっぽさや泣き叫ぶことの癖がつかないようにした。それゆえ、外人の中にも子供のためにラコニア女の乳母を買い求める者があった。じじつ、アテナイ人アルキピアデスの乳母となったアミュクラは、ラコニア女であったと伝えられている。

もっとも、プラトンが言っているように、ペリクレスはこのアルキピアデスに他の奴隷と何ら異なるところのないゾピュロスを付添役として置いた。しかし、リュクルゴスはスパルタ人の息子たちを購入されたり傭われたりした付添役の監督の下には置かず、また息子を自分が欲するように育てたり教育したりすることは誰にも許されず、すべて息子たちは七歳になるとすぐにリュクルゴス自身が受け取って少年隊に配分し、互いに生活と養育を共同にして、一緒に遊戯をしたり学習をしたりすることに慣れさせた。また、この男の子たちは、思慮深い点でまさり戦うことにおいて最も勇敢な者を、自分たちで少年隊の頭として立てた。そして、彼らはその男の子の方を見て、彼が命令すれば聞き従い、処罰すれば堪え忍んだので、教育は自発的な服従の練習となった。一方、年輩の者たちは彼らが遊戯しているところを視察して、常に戦闘と勝ちたい気持とを大いに鼓吹し、彼らのおのおのが、競争の際に大胆で戦闘を忌避しない点において天性はどのようなかを綿密に観察した。

さて、彼らは文字は有用性のために学んだが、その他のすべての教育も、立派に支配を受け、労苦して忍耐し、戦って勝つことのために行なわれた。それゆえ、人々は年齢が進むと男の子たちの訓練の厳しさを増し、髪のをすっぱり剃ってはだして歩み、たいていは裸で遊ぶことに慣れさせた。十二歳になると彼らはもう下着なしで生活し、一年間に一枚の上着を与えられるだけで、身体はかさかさしても沐浴や塗油をすることはなかった。ただ、一年に僅かではあるが何日間か彼らはそのような快適なものにあずかった。また、彼らは少年組ごと少年隊ごとに藺の床の上に一緒に寝たが、その床はエウロータス川の傍に生えている藺の先をナイフを用いずに手で折り取り、自分たちで集めて作った。冬には彼らはいわゆるリュコフォンを藺の床の下に入れて混ぜ合わせたが、それは、この下草がものを暖める性質を持つと思われていたからである。

これほどの年齢に達した者には、名声のある若者がもう愛人となって交際した。また、年輩の者たちも大いに注意を払い、ついでのようではなく、ある意味でみんなが少年たちすべての父であり、付添役、統率者であると考えて、

体育所に通い、彼らが互いに戦ったりからかったりしているところに立ち会って、失敗した者を戒しめ懲しめる機会と場所を空しく見過すことのないようにした。

それだけでなく、よい生まれの人々の中から少年監督官が任命され、また少年たち自身、少年隊ごとにいわゆるエイレンのうちで最も思慮深く戦闘的な者を常に指導者に選んだ。ただし、少年の年齢級の次の年にすでになった者がエイレンと呼ばれ、少年の年齢級のうち最年長の者たちは準エイレンと呼ばれる。ところで、このエイレンで二十歳になった者は、戦闘においては部下を指揮し、また家では食事の際に彼らを召使として用いる。彼は丈夫な者たちには焚木を持ってくるように命じ、小さい方の者たちには野菜を持ってくるように命じる。彼らのある者たちは菜園へでかけ、またある者たちは大人の共同会食場へ忍び込んで、まことに狡猾にかつ用心深く盗んで持ってくる。もし捕まると、不注意、不手際に盗もうと思っているというので、彼は鞭でたくさん打たれる。彼らは食物ならば何でも盗めるものを盗み、眠っている者や見張りをいい加減にしている者を上手に攻撃することを学ぶ。捕まった者への罰は打擲と空腹である。彼らが自分の力で欠乏から身を守ろうと、大胆になり狡猾になることを余儀なくされるように、彼らの食事は見すばらしいのである。

…(中略)…

少年たちはひじょうに注意深く盗むので、ある者などは狐の子を盗んでからすり切れた外套でくるんだが、その獣に爪や歯で腹をかき裂かれ、気付かれないうちに堪えていて死んでしまったと言われている。」⁽¹⁵⁾

以上の『プルターク英雄伝』を踏まえて、スパルタの教育について、長尾は次のように述べている。

「スパルタの国制や教育は立法家リュクルゴスによって確立されたといわれている。すべてをリュクルゴスに帰することはできないにしても、前600年頃か

らスパルタが作り上げた国制や教育は、ポリス共同体のうちでもきわめて特異なものであった。スパルタは征服にもとづいて成立したポリスで、ヘイロータイと呼ばれる奴隷身分の被征服民と、自由身分だが参政権をもたぬペリオイコイを農業や手工業に従事させ、市民たちはもっぱら政治と軍事とに専念する戦士団という性格を帯びていた。ヘイロータイは市民の分割地（クレロス）に分属して住み、家庭を営み、農具類なども所有して、農産物を市民に貢納した。したがって身分的には中世の農奴に近く、スパルタ総人口の1/2～2/3を占めていたといわれる。このヘイロータイの反乱に苦しめられたところから、そしてまたスパルタの国制は基本的にはヘイロータイの生産労働に依存していたところから、スパルタではヘイロータイに対する支配を強化するために、市民の団結を重んじその経済的平等の維持に腐心するかたわら、徹底した軍国主義的教育をおこなって、強固な閉鎖社会をつくり上げた。

リュクルゴス伝によれば、かれは市民の教育については、まず結婚と出生に対する配慮を先行させた。すなわち男女両性の身体を鍛錬させ、裸体の競技などもおこなわせて、強壮な男女の結合を奨励し、そうすることによって強健な子どもを得ようとしたのである。夫婦間の貞操も、この目的のためにはしばしば無視された。子どもはすべて国家の子どもとされ、育てるに値すると認められたものだけがクレロスを割りあてられた。不具、弱少の子はそのまま捨てるように命じられたのである。子どもの教育を奴隷に委ねることは許されず、7歳になった子どもはすべて同年齢の仲間たちとの集団生活に入って老人の指導のもとで『よく命令に服し、骨折りに堪え、戦って勝つために』きびしい訓練を受けた。実生活に必要な限りでの読み書きも学習したようである。12歳になると、エイレーンと呼ばれる2歳年長の若者を指導者として、さらに共同生活を続け、老人たちはエイレーンの指導の良否について助言することになっていた。スパルタの市民はいっさいの生業に就くことを許されなかったから、成人してからも1日の大部分をギムナシオンやレスケー（閑談所）で過ごし、みずから心身の錬磨につとめるとともに後進の指導にあたった。前7～6世紀

におけるオリュムピア競技の優勝者にはスパルタ人が圧倒的に多かったといわれるのもこのような事情にもとづいていたと思われる。

しかし、その反面、スパルタの優秀な青年たちはクリュプティアと呼ばれる一種の秘密警察的任務を課されることがあった。これはヘイロータイの反乱を予防するために、疑わしい者を暗殺する仕事で、これによって青年の潜行殺人能力を養ったといわれている。また、ヘイロータイに強い酒を飲ませて酔態を演じさせたり、卑しい歌や踊りを命じたりして、これを市民の青年に見せつけ、そうすることによって市民としての誇り（優越感、差別感）を自覚させるというゆがんだ慣行もあったらしい。」⁽¹⁶⁾

ここから分かるように、いわゆる「スパルタ教育」と俗に言われるスパルタの特徴的な教育が成立する歴史的原因は、スパルタというポリスのおかれた歴史的社会状況に由来している。長尾が「スパルタではラコニヤ地方に侵入した征服者としてのスパルタ人が、先住民に対する支配体制を確立するために集住したことからポリスが始まった」⁽¹⁷⁾と書いていたように、スパルタは、紀元前1100年頃にドーリア人がペロポネソス半島に侵入して作ったポリスであったが、その時、そこにはすでにイオニア系のギリシア人が多数先住しており、ドーリア人は彼らを征服して支配者になった。従って、スパルタにはペリオイコイと呼ばれるスパルタの中心から離れた集落に居住していた人々とその他一般の被征服民である奴隷身分のヘイロータイが存在しており、特にスパルタ市民の何倍にもなるヘイロータイの反乱を鎮圧するために、スパルタでは軍国主義体制をとり、優秀な兵士の教育が最優先されたのである⁽¹⁸⁾。このスパルタの教育体制は、その社会のありようが教育の在り方を規定した最も典型的な例だと言えよう。

そのスパルタの教育の特徴は、マルーに従って、「あらゆる努力は、軍事的準備に向けられていた。体育はその筆頭に位したといえよう。」⁽¹⁹⁾と要約できるであろう。強壮な男女の結合により強健な子どもを得ようとし、さらに、す

すべての子どもはスパルタというポリスの財産であると見なされ、出生時に検査を受けて、虚弱なものは捨てられ殺されたのである。生きることが許された子どもたちは、7歳から同年齢の仲間の中で集団訓練を受け、やがてエイレーンという先輩から指導を受けることになる。こうして、子どもたちは、一緒に寝起きし、苦楽を共にする中で、(ファランクスと言われる重装歩兵密集隊に必要な)一糸乱れぬ集団行動を身につけたのであり、戦友として極めて強固な紐帯で結びついたのである⁽²⁰⁾。

さて、では、一方のアテネの教育はどのような特徴を示していたのであろうか。この点について、長尾は次のように説明している。

「アテネは前6世紀におけるソロン、ペイストラトス、クレステネスらの指導のもとでいくたの曲折を経ながら、次第に中・小土地所有市民の民主的な政治参与制度を確立した。農産物の自給自足が困難であったから、果樹類を輸出して穀類を輸入する必要があり、この商業との結びつきがアテネに開放的な性格を与えた。スパルタとちがって征服民をもたなかったアテネは、この海外貿易によって奴隷を国外から獲得したのであり、アテネにおける民主制の確立期は、購売奴隷制の発展期でもあった。いうまでもなくその民主制はアテネ市民だけのものであって、奴隷は『生命をもつ道具』(アリストテレス)にすぎず、家庭を営むことさえ認められていなかった。

アテネ市民の教育は、原則として各家庭の方針に委ねられていた。立法家ソロンも市民の教育については特別の規定を設けておらず、もっぱら健全な家庭生活や社会生活の教育的機能に期待をかけていたようである。プルタルコスによれば、ソロンは、結婚が精神的には愛によって、肉体的にはよい子どもを生みうるという条件にもとづいておこなわれるべきこと、夫婦間の貞操は堅固であるべきこと、正式の妻によらない子や、父からいかなる生業も教えられなかった子は、父親を扶養する義務を免ぜられること、などを規定している。

一般の慣行としては、乳児は母または乳母によって養育され、幼児は母および侍女によって躾けられた。7歳になるとパイダゴゴス(教僕)とよばれる学識ある奴隷の監督のもとに私立の教授施設や体操教習所に通い、初歩の読み書き、算術、詩の朗吟、音楽(器楽、唱歌)、五種競技(跳躍・競走・円盤投・槍投・角力)、水泳などを学習、16歳からはパイダゴゴスの手を離れてギムナシオン(公立体育場)でさらに体育や武技の錬磨にはげみ、18歳に達するとエプーボス(青年団)に加えられて、武装を整え戦士としての誓いをたてる。市民権を得て政治に参加できるのは20歳からであるが、成人ののちもギムナシオンに通って心身の錬磨につとめるべきであるとされていた。」⁽²¹⁾

スパルタとは対照的に、「スパルタとちがって征服民をもたなかったアテネは、この海外貿易によって奴隷を国外から獲得したのであり、アテネにおける民主制の確立期は、購売奴隷制の発展期でもあった。」と言われている。つまり、「アテネでは、アッチカ地方の村落から成長した有力者たちが、政治・経済・軍事などの必要から中心部に集住したことからポリスができた」⁽²²⁾から、(もちろん、ポリス防衛という重要課題が存在していたことは言うまでもないが、にもかかわらず、スパルタと比べた場合)被征服民対策としての軍事力強化に心を砕く必要はなかったのであり、ソロンの改革などを経て、アテネ市民による民主制が確立したこともあり、それらの歴史的な社会状況が教育へ大きく影響を与えた。この点について、マルーは「ギリシアの教育が本質的に軍事的であることをやめたのは、紀元前六世紀半ばのある時期(不幸にも正確には決めがたい)アテネにおいてなのである。」⁽²³⁾と明確に指摘している。

このようなアテネの教育については、しばしば引用されるように、「身体のためには体育が、魂のためには音楽がある」⁽²⁴⁾というプラトンの言葉が巧みな要約になっている。この場合の体育に関しては、スパルタのような「軍務の直接的な見習い訓練」⁽²⁵⁾にポイントが置かれたのではなく、身体美が理念として目指された。このことは、当時の教育の目標であった「カロカガティア」⁽²⁶⁾

つまり「美しく良き人たらんとすること」⁽²⁷⁾という言葉における「美」が「身体的な美」⁽²⁸⁾に他ならなかったということからも裏付けられる。また、音楽の方は、ムウサ(ミューズ)の女神たちが司るすべての学術・芸芸を含むが、直接的には特に音楽と詩を指すといわれる⁽²⁹⁾。従って、ここでの音楽は、声楽と器楽を中核としながらも、現在の音楽よりも広い意味を持っていたのであって、たとえば詩による教育をおこなうことで、音楽は若者の道徳的・形成という役割を担ったのである。

以上がアルカイク期のアテネについてであるが、マラーが「文学的であるより芸術的、知的であるよりスポーツ中心のものだった」⁽³⁰⁾というアルカイク期のアテネの教育は、時代が下り、紀元前5世紀のペルシア戦争後のクラシック期になると、大きく変わることになる。そこでは、ソフィストやソクラテス、プラトンなどにふれねばならないが、それは稿を改めておこないたい。

注

- (1) 長尾十三二 『西洋教育史』、東京大学出版会、1978年、56頁。句読点の表現など一部改変。なお、「ギリシャ」は「ギリシア」という表記に統一した。以下同様。
- (2) 山本茂ほか編 『西洋の歴史〔古代・中世編〕』、ミネルヴァ書房、1988年、101頁
- (3) 同上書、67頁
- (4) 同上書、88-90頁。この当時の民主制や市民の意味を考えるにあたって、ポリス共同体の防衛という戦闘への参加資格は極めて重要である。そもそも、この当時は「武具自弁の原則」があったので、当初、高価な青銅製の武具を用意し戦闘に参加できたのは貴族に限られており、これが貴族政ポリスの基盤であった。これが、やがて、資力のある一般市民の登場や金属加工技術の向上に伴う武具の価格下落によって、中流市民までが重装歩兵になることが可能になり、そのために貴族政ポリスが崩壊し、戦闘に参加できる中流市民までによる民主制が推進された。そして、さらに、ペルシア戦争において、重装歩兵になりえない資力の乏しい下層市民が軍船の漕手(水兵)になり、サラミスの海戦の勝

利の原動力になった。ここに至って、下層市民は強い政治的発言力を獲得することになり、下層市民も含んだ民主制が実現することになる。ここからも分かるように、当時の民主制とそれに参加できる市民の意味を考える場合、その土台になるのが「戦闘に参加しうるものだけが政治にも参与しうるという原則」に他ならない。つまり、当時の民主主義とは、戦士という市民による政治なのである。この意味で、当時の民主主義は現代の民主主義とは決定的に異なることを認識しておかねばならない。また、当然のことながら、そのような「市民」を形成する教育は、現代の市民教育とは全く異なるものとなるのである。

- (5) H .I .マラー著、横尾壮英ほか訳 『古代教育文化史』、岩波書店、1985年、12頁。引用者により一部改変。以下同様。
- (6) 同上書、19頁
- (7) 同上書、24頁
- (8) 同上書、19頁
- (9) 同上
- (10) 同上書、21頁
- (11) 同上書、22頁
- (12) 同上書、23 24頁
- (13) 長尾十三二、前掲書、7 8頁
- (14) E .R .クルティウス著、南大路振一ほか訳 『ヨーロッパ文学とラテン中世』、みすず書房、1971年、49頁
- (15) プルタルコス著、村川堅太郎訳 『プルタルコス英雄伝 上』、筑摩書房、1996年、76 80頁
- (16) 長尾十三二、前掲書、8 10頁
- (17) 同上書、5頁
- (18) 山本茂ほか編、前掲書、81 82頁
- (19) H .I .マラー、前掲書、34頁
- (20) この点に関連して、「一般には世論、スパルタでは法律が、愛する者を、愛される者の成長の道徳面における責任者とみなしていた。少年愛は、教育のなかで最も完全で、最も美しい型のものとみなされていた。」(同上書、45頁)というマラーの指摘は重要であろう。まさに、「教師と生徒の関係は、古代人の場合いつも、何がしか愛する者と愛される者という型をとっている。」(同上)のであり、「教育は、本来、教授、技術的な指導というよりも、年長者が若者の成長のため優しく配慮する世話の全体だったのであり、その場合は若者の方も、年長者の愛にふさわしいことを示し、それに応えようという熱意に燃えたのである。」(同上)

- (21) 長尾十三二、前掲書、8頁
- (22) 同上書、5頁
- (23) H.I. マルー、前掲書、50頁
- (24) プラトン著、藤沢令夫訳 『国家(上)』_a、岩波書店、1979年、153頁。引用者により一部改変。
- (25) H.I. マルー、前掲書、34頁
- (26) 同上書、59頁
- (27) 同上
- (28) 同上
- (29) プラトン、前掲書、437頁
- (30) H.I. マルー、前掲書、58頁